# 論　文　の　和　文　要　旨

| | |
|---|---|
| 論文題名 | 海外の日本語の新しい言語秩序<br>— 日系ブラジル人社会の敬意表現の新生 — |
| 氏　名 | 山　下　暁　美 |


本研究は日系ブラジル人の日本語における敬意表現に関して実施した調査の結果に基づいて、日系ブラジル人の日本語の新生を明らかにするのが目的である。本稿では日本語の敬意表現を文法体系に組み込まれた、「敬語」において考えることにする。ここでは敬語の三分法によって「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」の分類を採用する。

研究を進める上での着眼点は次の点である。(1)敬語の使用と属性・意識の関係を明らかにする。(2)移住先の言語であるブラジル・ポルトガル語の干渉が日本語の敬語のどんな部分に見られるかを分析する。(3)敬語使用が社会構造の変化によってどのように変化したかを分析する。(4)(1)から(3)によって日系ブラジル人社会における日本語の新生を位置付ける。

1908年に開始されたブラジルへの移住によって、西日本、中でも九州・中国地方の日本語は、ブラジル・ポルトガル語と言語接触をする。日本政府はブラジルへ戦前に20万人、戦後に5万人、合計25万人の移住者を送り出した結果、現在、日系ブラジル人の人口は約130万人を数える。移住者の職業は70%近くが農業従事者であった。

日系ブラジル人の日本語の特徴について鈴木(1982)は(1)ブラジル語からの借用が目立つ。(2)日本の方言、特に西部方言がそれと意識されずに混入している。(3)日系人社会特有の語彙・語法があるという3点を挙げている。その要因として(イ)ブラジル・ポルトガル語の干渉、(ロ)日本各地の方言の融合(と淘汰)、(ハ)日系人社会の歴史的社会的状況を指摘している。

野元(1969)はブラジルの日本語は非常に乱暴だとの印象は拭えない。その原因は敬語的精神基盤のない所に育った日本語だからとしている。また、女性は女性語を使いこなせないとしている。野元の「敬語的精神基盤のない」の意味は、立場が皆同じ移住者の精神基盤を指しているものと思われる。生活をしていくのが精一杯の状況で、他を敬う、配慮する余裕はなかったであろう。

調査実施について、本研究のための予備調査を、日系ブラジル人が集中するブラジル、サン・パウロ州で行った。ここでいう日系ブラジル人とは日本人移住者とその子孫である。サン・パウロ州は人口、約 950 万人の商工業大都市である。その後、本調査をリオ・グランデ・ド・スール州のポルト・アレグレで行った。ポルト・アレグレは人口 127 万人の港湾工業都市である。また、参考に日系アメリカ人社会と、移住者をブラジルへ送り込んだ県の中で上位に入る日本の地域で調査を行った。国内の日系ブラジル人の町でも同様の調査を行った。日系ブラジル人の敬意表現の使用をこれらの地域との比較で述べることにする。本研究はアンケート(筆記式)を行った結果の分析を中心に考察を進める。

全体的な分析の構成としては、日系ブラジル人の日本語における敬意表現の新生について、言語項目とそれを取り巻く非言語項目の関係から述べた。言語項目を取り巻く条件として、非言語項目を同心円の外側に置いた。言語項目は、動詞を中心とした敬語形式を同心円の中央に置き、次に語彙を中心とした「オ～」・「ゴ～」を外側に、さらに外側に呼称を位置付けて、敬意表現の全体像を考察した。言語項目を取り巻く、非言語項目は意識を言語項目に近い内側に、敬語形式から最も遠い外側の円に属性を置いて、言語項目とのつながりを見た。

全ての項目から得られた結果の全体像を、表面的に見ていると、敬語形式の使用などに、二重構造が見え、その二重構造について、さらに分析を重ねると、日本から持ち込まれた日本語が共通語化した当時の「コロニア型」の存在が明らかになった。

本稿では日本を出発した時の日本語を「日本型」、入植地での共通語を「コロニア型」として、中間的な言語体系を持つ日本語という位置付けで述べた。コロニア型からブラジル社会に適応した新体系を「都市型」と名付けた。言語項目のコロニア型から都市型への移行は、2 世、3 世の間に見られ、職業と社会階層も平行して起こっていることがわかった。

コロニア型は、それぞれの土地から持ち込まれた西日本の方言を含む西日本型を基盤に、共通語になった体系を意味するが、敬語形式では、5段階の使い分けがしっかりしていて、あらゆる敬語形式を使い分けながら、目上に対して丁寧な敬語形式を用いる。呼称について、日本で最もポピュラーな形の「(お)父さん(ちゃん)」・「(お)母さん(ちゃん)」が用いられ、家庭は家父長制を保っていると思われる。目上や年輩者に「尊敬」と「礼儀」の態度で接している。母語は日本語が多く、世代は一世、二世が中心であろうと思われる。敬語形式が「母語」、「世代」、「コロニア在住経験」と、最も強い相関関係を示したことから、この体系をコロニア型として、新体系以前の中間言語として位置付けた。入植地での経済基盤が安定すると、家族ぐるみの労働によって支えられた集団生活は、非常に閉鎖的な中で集団の結束力をつけた。リーダーに対する敬語の使用が必要とされたと推測できる。コロニア型の敬語形式は聞き手本位の日本語である。

一方、新体系の都市型は、コロニア型を中間言語として発達した体系で、入植当時の地域を出て、都市に向かった日本語である。初期の日系ブラジル人が農業から商業へ移行しはじめたのは、わずか、ここ30年のことである。最初は日系ブラジル人を相手にした、床屋やクリーニング屋、雑貨商などであったが、徐々に信用を得て、日系企業と呼ばれる会社組織が誕生した。そこでは、日本との交渉が必要とされ、コロニア型日本語の上に、日本語学校などでの日本語学習が必要になった。

都市型は敬語形式としては、「デス・マス」を最も高い頻度で使用し、丁寧度2段階の「～レル・ラレル」が併用される。敬語形式及び「オ～」・「ゴ～」の使用については性差がない。多くの表現形式や語彙にブラジル・ポルトガル語の干渉が見られるが、その1つに身分差より、年齢差を基準に述べる傾向が挙げられる。呼称には主にブラジル・ポルトガル語や名前が取り入れられている。日本人の敬意表現では、性差、学歴などが相関関係を示す(国立国語研究所1990)が、日系ブラジル人の敬意表現にこれらの要因は大きく作用しない。男性だから、女性だから、また、高学歴だからこう話さなければならないという規範がゆるみ、誰にでも話しやすい言語体系で、解き放たれた日本語と言える。そして、都市型の日本語は「やさしさ」、「丁寧さ」の表出を重視した話し手本位の日本語であると言える。

都市型の特徴である、「～レル・ラレル」の使用が多いことについては、方言の使用率と関係がある。日系ブラジル人社会では方言が多く使用されているが、「～レル・ラレル」の使用と、両親の出身県は非常に強い相関関係を示した。都市型は西日本の敬語形式である、「～レル・ラレル」を多く使用し、なおかつ、丁寧語の「デス・マス」を使う。

次に、敬語形式及び「オ～」・「ゴ～」の使用に性差が見られない理由として、いくつか考えられる。まず、方言は男性語・女性語の区別が標準語ほどはっきりしていない。

そして、都市型に、性差のない敬語形式及び「オ～」・「ゴ～」の使用が受け継がれたということが考えられる。

第 2 の理由として、家父長制色の強い家庭で、寡黙で、忙しく働く父親より、子供が主に母親や子守り役の人(ブラジルでは女子学生や退職後の婦人などを雇いやすい)から日本語を習得する時、言語形式に性差があることを認識することは難しいことが挙げられる。家庭内における母子間習得の日本語を、男性の方が忠実に使用しているとも言える。

第 3 に農業を続けて行く中で、男女の仕事分担はあいまいで、男性がする仕事を女性もいっしょにやらなければ、一家を支えていくことは難しかったと想像される。女性が女性語を使う必要がなく、むしろ邪魔にさえなったのではないかと考えられる。

敬語形式の使用に身分差より、年齢差を基準にしている傾向が見られることについて、Jensen が説いているように、ブラジル・ポルトガル語では、動詞の格変化や所有格などで相手に対する待遇性は示されるが、待遇性は年齢によって決定されているとしていることから、それが日本語に干渉しているということが理由の一つと考えられる。また、文化庁 1998 によると、敬語を使う基準が、九州地方では年齢重視となっていることも、理由として考えられる。野元は日系ブラジル人社会に「敬語的精神基盤がない」と述べているが、身分差による使い分けをなくした日系ブラジル社会の日本語に、年齢差を基準にする敬語形式の新体系が生まれた。

そして、ブラジル・ポルトガル語の干渉の要因として、日本語がコロニアを離れ、都市に向かったということが背景にあると考えられる。都市に移動した日系ブラジル人はブラジル社会で中間層を築き、次の世代の「母語」はブラジル・ポルトガル語にな

った。都市型日本語では、丁寧語を中心とした社交敬語が必要であり、「デス・マス」が最も多く使用されるようになった。

ブラジル・ポルトガル語の最も丁寧な形の三人称 S の使用率が中間層→上層→下層の順に増加することが、日系ブラジル人の日本語の敬語使用にも当てはまりそうである。すなわち日系ブラジル人社会の敬語は中間層→下層の方向に丁寧度が上がるのである。上層について日系ブラジル人はごく少数で述べられる段階に来ていない。

日本型からコロニア型、さらに都市型への変化を見ると、100 年を経た敬意表現の新体系が、日系ブラジル人の社会生活を物語っている。